

$p<0.001-0.03$ 、最低点；16-28 vs 40、 $<60\%$ の学生の割合（%）；96.4, 18.6, 51.1, 52.6 vs 10.8； $p<0.001-0.05$ ）。

【考察】 BFCにより、確実に予習を行うこと、講義の開始時・終了時に行う小テストで知識が定着すること、講義内で問題解決的内容を扱えることなどにより、認知領域の学習効果を効率的に高めると考えられた。一方、医学科への導入に際しては、現在の講義スケジュールでの実効性、反転授業から典型的な Team Based Learning への変更の検討などを考慮する必要はあるが、その学習効果は大いに期待できると考えられた。

P3-48

eポートフォリオは「知識基盤型社会」を生きる学生の成長の力になれるか

(医学教育学)

○油川ひとみ、青木 昭子

ブルーヘルマンズラウル、三苦 博

山科 章

(産科婦人科学)

野平 知良

(耳鼻咽喉科・頭頸部外科学)

清水 顕

(精神医学)

市来 真彦

(腎臓内科学)

長岡 由女

(血液内科学)

赤羽 大悟

(医療の質・安全管理学)

三島 史朗

(臨床検査医学)

天野 景裕

(糖尿病代謝内分泌リウマチ膠原病内科学)

太原恒一郎

(泌尿器科学)

中神 義弘

【背景】 知識基盤型社会における教育ではコンピテンシー（知識のみならず、スキル、思考力、コミュニケーション能力、問題解決力、経験、態度など）の育成が重視される。本学の臨床実習ではeポート

フォリオの日誌を全科で使用可能としている。指導教員が学生の日々の省察を記録した日誌にコメントを書き「足場かけ」を行うことで学生の生涯学習の礎としてのコンピテンシーの育成を図っている。また、電子化された記録を残すことは学習のエビデンスとして学生の財産となる。しかし、この教育方法は臨床・研究・教育をこなす医学科の教員には大変負担の大きいのも事実である。それゆえに学習過程のみならず教育効果の見える化も必要と考え、eポートフォリオを用いた指導が学生の成長の力になり得るのか調査した。

【方法】 2018年度の臨床実習の学生（医学科4-5年生112名、期間：2018年1月～12月）のeポートフォリオの記載の割合と記載された動詞を成長段階の測定のために3段階に分けてテキストマイニングを行った。調査は日誌数とコメント数の調査と全体のテキストから動詞のみを抽出して行った。また各科で行ったeポートフォリオ使用のアンケート結果をまとめた。

【結果】 日誌の記載数は教員のコメントが多い診療科に多かった。アンケートでもコメントが多い科に「主体的な学びができた」「学習の役に立った」「教員との距離が近くなった」などの評価が高かった。動詞は、いわゆる守破離のプロセスでは学生が「守」の指導教員の監督指導下での実習および学習が行われていることを示しており、臨床実習の1年間では概ね「守」の段階にとどまることが分かった。

【考察】 今回の調査では指導教員の熱意がeポートフォリオの学生の記載数および学習満足度に反映されていること、また、動詞を計測することで学生の成長段階を把握できる可能性が示唆された。今後学生の成長段階に応じた指導に結びつけて行くことがのぞまれた。